

若手研究者のウェルビーイングと対人関係

近藤(有田) 恵

(京都大学こころの未来研究センター 特定研究員)

平石 界

(京都大学こころの未来研究センター 助教)

内田 由紀子

(京都大学こころの未来研究センター 助教)

大石 高典

(京都大学こころの未来研究センター 特定研究員)

2010年12月



京都大学グローバル COE

「親密圏と公共圏の再編成をめざすアジア拠点」

Global COE for Reconstruction of the Intimate and Public Spheres in 21st Century Asia

〒606-8501 京都市左京区吉田本町 京都大学大学院文学研究科

Email: intimacy@socio.kyoto-u.ac.jp URL: <http://www.gcoe-intimacy.jp/>

1. 問題と目的

研究者にとってのウェルビーイングとは何か？ポスト博士課程問題に表されるように、研究者として職を得ることは難しくなっている（岩崎,2009）。また、女性研究者を取り巻く環境を男女共同参画の視点からその厳しさを報告しているものもある（今田, 2008）。とりわけ若手研究者が生きる環境の厳しさから、研究者を対象とした研究は増えてきているが、こうした研究は研究者の研究業務の部分に光を当てているものの、一個人としての研究者の在り方について十分な議論がなされていない。研究者を単に研究をこなすものではなく、一人の人間として捉える時、業績や職を含む研究だけではなく、他者との関係を基とした私生活の充実も視野に入れる必要がでてくる。

ライフサイクルを基盤とした生涯発達の観点からみても、若手研究者（前期成人期 20代～30代）の時期は、就職、結婚、出産、子育てとライフイベントが集中する。前期成人期の課題について、「①配偶者を選択し求愛する。②配偶者と幸福な生活を営む。③子どもの誕生を喜ぶ。④子どもをしっかりと育てる。⑤責任をもって家庭を管理する。⑥職を得る。⑦一人の市民としてその責任を実行する。⑧社会的繋がりに適切に関与する。」の7つをハビィガースト（1953）は挙げている。このように重要な他者との親密性や社会へのコミットメントが求められる成人期前期を、研究室という特殊な環境で研究者は過ごす。また、人間にとって、社会関係とのつながりは基本的な欲求であり、自尊感情と良好な人間関係が心身の幸福感をもたらすことが知られている（Ryff & Keyes 1995; Cacioppo et al. 2003）。これらの課題を研究者にひきつけて考えてみると、就職、親密な他者（配偶者、パートナー）との関係、研究室をはじめとした社会的繋がりが研究者にとって重要であると考えられる。下山（1990）は、現代成人の特徴として、職業生活へのコミットメントの達成に比べ、重要な他者との親密性の形成（家族形成）は先延ばしされる傾向にあると述べる。

京都大学女性研究者支援センターの調査によれば、特に女性研究者にとって、研究者としての職を得ることは難しく、また、子どもを持つことを含めた家族形成や親密性の維持の両立は困難を極める（京都大学は男女共同参画の取り組みを行っているものの、女性研究者の割合は全体の約7%にすぎない）。研究の充実と家族形成の両立に関する葛藤は、女性研究者だけの問題だけではなく、性による役割分担が以前ほど固定的でなくなった現代（下山, 1990）においては、男性研究者にとってもまた解決しなければならないものである。研究者の精神生活において、職業人としての幸福感と、社会生活を送る個人としての日々の幸福感は、どのように重なり合い、競合し、あるいは補い合っているのだろうか。

筆者たちは、冒頭に挙げた問いをもとに昨年度、「研究者のウェルビーイング：対人関係がパフォーマンスと精神健康に与える影響」（京都大学女性研究者支援センターとグローバル COE プログラム「親密圏と公共圏の再編成をめざすアジア拠点」の共同による「京都大学における男女共同参画に資する調査研究」）の調査を行った。

京都大学大学院に在学中、とりわけ研究者を目指している男女を対象に行った量的調査からは、1. 職業生活に関しては、研究室におけるD4以上の大学院生の存在と自尊心に

関係があること、2. 社会生活（親密性）に関しては、私生活におけるパートナーの有無が特に女性研究者にとって大きな影響を与えていること、3. 研究生活に関しては、研究スタイルとして、個人研究と共同研究のバランスが若手研究者の幸福感に影響を与えていることが示唆された。また、質的研究（インタビュー）からは、指導教官との関係性が研究生活や職業生活に大きな影響を与えること、また、職業選択や研究生活の選択における男女差があることが示された（近藤ら，2010）。しかしながら、この調査ではサンプル数が少なく、また、協力者が持つ背景（身分、研究分野、性別など）に偏りがあったため、得られた結果は示唆の域をでていなかった。

そこで京都大学における若手研究者の幸福感を考える上で特に下記の諸点を明らかにする必要がある。

1. 研究業績の多寡、研究スタイル、専門分野や所属階級の相違（大学院生・PD と有職者）が幸福感にもたらす効果についての再検討
2. 私生活と研究生活の両立のために必要な条件としての研究室内外の人間関係の解明
3. 研究者として生き延びるために若手研究者がとっている多様な戦略の解明

本研究では、質問紙調査と面接による聞き取り調査を、准教授までを含む常勤研究者（京都大学と雇用関係にある男女研究員・教員）に調査対象を大きく拡大し、研究者のウェルビーイングにおける人間関係の重要性について検討した。具体的には（1）量的研究において、研究者のウェルビーイングに関係していると思われる要因として、「研究業績」「他者との関係性」「パーソナリティ」を検討した。また、（2）質的研究においては、研究者が日々の生活の中で何を思い、研究と私生活を両立しているのかについて、生活史の語りを聴くことによって、より具体的に明らかにすることを試みた。量的な調査からは、本人の性向が幸福感に大きな影響を与えることはもちろんのこと、研究室内の人間関係や家族を含めた親密な他者との関係が幸福感に大きな影響を与えていることが明らかとなった。また質的な調査からは、「研究歴」「ライフスタイル」「人間関係」の3つを中心にした語りから、他者との親密性が幸福感に大きな影響を与えていることが示唆された。量的研究と質的研究の双方を実施することによって、研究者は個別の研究にのみ幸福を求めめるのではなく、私生活の充実を望む一人の人間であること、また、研究、私生活の両面において、他者との親密性がウェルビーイングの鍵となることが明らかにされた。

なお、本調査におけるウェルビーイング（幸福感）については、日常生活の中で幸福感を感じることに、より全体的なレベルで人生を評価した際の幸福感を含めて扱うこととした。これまでの幸福感研究では、日々感じる幸福感の経験と人生への満足度はそれぞれ独立の概念でありながら、双方が精神的幸福の有効な指標であることが多くの研究から示されている(Diener & Suh, 2000)。そこで本調査でも同様の定義を採用することにした。また、研究者のウェルビーイングに特化して考える際には、良い研究を実施し、アウトプットを

出していくことに関わる自尊感情も重要な要素であると考えられる。そこで今回は自尊心についてもその定義に含め、調査を行うことにした。

2. 質問紙調査（量的調査）

（1）目的

若手研究者のウェルビーイング（幸福感）にはさまざまな要因が影響すると考えられる。質問紙調査では、こうした要因を、有職研究者を対象に定量的に検討した。筆者らによる予備的調査（近藤ら, 2010）により、大学院生を中心とした若手研究者のウェルビーイングには「研究室内外での他者との関係性」そして「本人の性向」が影響することが示唆された。一方、研究業績とウェルビーイングには有意な関係性は見いだされなかった。しかし大学院生の研究上の実績は、必ずしも論文数や著書数に十分に反映されているとは限らない。指導教員の指導方針などによって、論文執筆よりも研究の充実を優先させるようなことも考えられるからである。そこで本調査では、有職研究者を対象として、予備調査において示された「他者との関係性」および「本人の性向」が、ウェルビーイングと関係するか調査するとともに、改めて研究業績とウェルビーイングの関係についても検討した。また、仕事とプライベートのバランス、すなわちワーク・ライフバランスの観点についても検討した。

（2）方法・分析

A 質問紙の構成

研究者のウェルビーイングに影響を与えうる独立変数として、大きく「研究業績」「他者との関係性」「パーソナリティ」の3つの次元を検討した。郵送調査という手法を用いる関係上、回収率を高めるために、質問紙の項目数はかなり大幅に削る必要があった。大学院生を主たる対象とした予備調査研究（近藤ら, 2010）の結果を鑑み、以下の項目を含めた（質問紙の全容については筆者に問い合わせのこと）。

a. 研究業績

公刊されている研究業績の数を尋ねた。具体的には著書の数（単著・共著・分担執筆）、論文の数（査読論文・査読なし論文・紀要）を尋ねた。

b. 他者との関係性

若手研究者に重要と考えられる社会関係として「家族」「研究室」そして「(配偶者などの) パートナー」を取り上げて尋ねた。それぞれの関係については、その単純な量（例：家族数など）と、それぞれの関係への各研究者の評価（例：研究室メンバーとの関係を良好と捉えているかどうか）の二つの面から尋ねた。

単純な量的側面については、家族については、家族構成に加え、家族内に研究者がいる

かどうかも回答してもらった。研究室については、研究室のメンバー構成だけでなく、研究スタイル（共同研究か単独研究か）、主たる研究場所（研究室・フィールド・実験室・自宅）、主たる研究場所における滞在時間などを尋ねた。「パートナー」については、現時点におけるパートナーの有無に加え、パートナーとして研究者を望むか否か、選択形式での回答を求めた。

関係の評価の側面については、関係性効能感（2項目、遠藤・柴内・内田, 2007）、相互独立性（3項目、Singelis, 1994：項目例「自分の意見をいつもはっきりいう」）、相互協調性（3項目、Singelis, 1994：項目例「しばしば自分の業績よりも他人とのつきあいの方が大切だと感じる」）、自尊心随伴（10項目、内田, 2008を改変：項目例「私の自尊心は研究業績によって影響される」）、研究室の関係性（3項目、Hitokoto & Uchida, 2010を改変して使用：項目例「研究室内（もしくは学科・講座内など）に心を開ける人がいる」）の各尺度を用いた（いずれも原版よりも大幅に項目数が削減されていた）。これにより、対人関係の結び方における態度（相互独立性、相互協調性）、自身の対人関係への自己評価（関係性効能観）、対人関係や業績が自己評価に与える影響（関係性・業績への自尊心随伴性）、そして対人関係自体の評価（研究室の関係性）について調べた。相互独立的自己観は、人は周囲から独立した個人として認識され、自らの意図や能力・態度を原動力として行動したり思考したりするものであるとするモデルである。これに対して相互協調的自己観では、人は周囲と結びついて成り立つ存在として認識され、周囲との関係性や状況要因と調整をしながら行動したり思考したりするものであるとされている（Markus & Kitayama, 1991）。

c. パーソナリティ

DeNeve & Cooper (1998) によるメタ分析から、パーソナリティ心理学において主流である Big 5 と呼ばれるパーソナリティ次元のうち、「外向性 (extraversion: E)」「神経質さ (Neuroticism: N)」「愛想の良さ (Agreeableness: A)」の3次元が幸福感に影響することが明らかになっている。これらのうち、パーソナリティにおいて特に重要な2次元とされる外向性と神経質さについて尋ねた。尺度としては、NEO パーソナリティ尺度 (Costa & McCrae, 1992) の短縮版 (NEO-FFI) の日本語版 (Yoshimura et al., 1998) から、上記2次元を実施した。そもそもの NEO-FFI では、「神経質さ」「外向性」「開放性」「愛想の良さ」「誠実性」の各次元から1項目ずつが、この順で提示される。次元ごとに12項目があるので、全60項目からなる質問紙となっている。本調査では、そのうちの24項目を実施した。上述の2次元の項目を除く以外には、項目の提示順に変更は加えなかった。

d. ワークライフバランス

日々の生活の何にどれだけのエネルギーを割いているか、そして理想のエネルギー配分はどのような形になるのか、自由記述により回答を求めた (図1)。

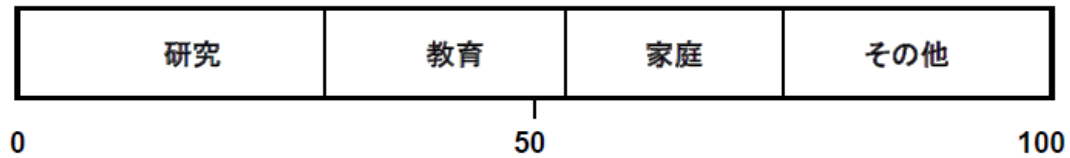


図1 棒グラフ記入例

e.理想の研究者像人生と将来像

理想の研究者像を5つ、自由記述により回答を求めた。

f.ウェルビーイング

若手研究者のウェルビーイングを測定する従属変数としては、ローゼンバーグの自尊心尺度 (Rosenberg, 1965) から5項目、感情状態尺度 (Uchida, et al., 2008 参照) から17項目、ならびに人生満足感尺度 (Diener, et al., 1985) 5項目を用いた。感情状態尺度は、普段の感情状態について、「ポジティブ感情」「ネガティブ感情」「身体症状」の三次元により問うものであった。自尊心得点とポジティブ感情得点、人生満足感得点は高いほど、ネガティブ感情得点と身体症状得点は低いほど、ウェルビーイングは良好であると考えられた。

B 質問紙の配布と回収

質問紙は封筒に入れて、京都大学の学内便によって配布された。回答は、無記名の封筒に入れて学内便にて返却された。質問紙の配布に当たっては、質問紙の他、返却用封筒および回答用のボールペンを同封した。女性研究者については2009年3月、男性研究者については2009年9月に質問紙を配布し、それぞれ約1ヶ月の回収期間を設けた。

C 調査対象者

質問紙の配布対象者は、京都大学に研究者として勤務する者とした。女性研究者については、京都大学にて研究員、助教、講師、または准教授として勤務する全ての研究者 (438名) を対象に、質問紙を学内便にて配布した。返送があったのは167名であった。また5名は産休・育休中であったので、返却率は38.6%であった。

男性研究者については、教職員名簿 (2008年度版) よりランダムに抽出した研究員、助教、講師または准教授、合計693名に質問紙を学内便にて配布した (内42名は退職)。返送があったのは195名 (返却率30.0%) であった。

返送のあった男女合計361名 (男性195名、女性167名) のうち、50代以上の者、昇進

等により調査時点で教授、客員教授となっていたもの、また外国人研究者を調査対象外とした。残った男性 159 名、女性 134 名の合計 293 名を分析対象とした（年齢は 28～49 才、平均 37.63 才、SD 5.62）。専門領域身分、研究スタイル、未婚か既婚かの分布は表 1 から表 4 の通りであった。

表 1：調査協力者専門領域分布

専門領域	総合・新領域	人文社会系	理工系	生物系	医学臨床系
男性人数	11	7	69	48	24
女性人数	12	20	28	38	35
合計	23	27	97	86	59

$\chi^2(4) = 24.73, p < .0001$ 女性より男性の方が理系分布が多かった

表 2：調査協力者身分分布

身分	PD	研究員	助教	講師	准教授
男性人数	3	12	65	15	63
女性人数	3	49	54	3	23
合計	6	61	119	18	86

$\chi^2(4) = 48.12, p < .0001$ 女性より男性の方が職階分布が上位であった

表 3：調査協力者研究スタイル分布

研究スタイル	個人研究	共同研究	半々
男性人数	77	46	36
女性人数	77	35	20
合計	154	81	56

$\chi^2(2) = 3.59, ns$ 男女に偏りなし

表 4：婚姻状況

	未婚	既婚
男性人数	27	132
女性人数	48	85
合計	154	81

$\chi^2(1) = 13.85, p < .001$ 男性研究者で既婚率が高い

(3) 結果

各心理尺度は、先行研究にしたがって得点化された。それぞれの心理尺度の回答の信頼性（クロンバックの α ）は表5の通りであった。

表5：心理尺度の信頼性

心理尺度	α
自尊心	0.84
神経質	0.86
外向性	0.87
ポジティブ感情	0.78
ネガティブ感情	0.78
身体症状	0.86
人生満足感	0.87
関係性効能感	0.86
相互独立性	0.64
相互協調性	0.54
業績への自尊心随伴	0.67
関係性への自尊心随伴	0.55
研究室の関係性	0.68

項目数を元の尺度より絞り込んだため、 α 係数が0.6より低くなってしまった項目（相互協調性、関係性への自尊心随伴）については以後の分析に含めないこととした。

A 性差について

男女別の項目の平均値は表6の通りであった。t検定の結果、多くの項目で男女差が確認された。子供の数や同居家族数は男性の方が女性より多く、これは既婚率が高かったこととも関連していると考えられる。また、研究室・ゼミ・講座への滞在時間は男性で女性より長く、研究室を主な活動場としている確率も男性で高かった。業績も男性>女性であった。心理尺度については自尊心が男性>女性、神経質さが女性>男性、また、身体症状も女性>男性であった。業績への自尊心の随伴性は男性で高かった。

表6 項目の男女差

		平均値	標準偏差	t	p
子供の数	女性	.40	.72	-6.80	.000
	男性	1.14	1.11		
同居家族数	女性	1.05	1.12	-5.84	.000
	男性	1.91	1.38		

		平均値	標準偏差	<i>t</i>	<i>p</i>
研究室・ゼミ・講座等滞在時間	女性	3.42	1.00	-2.44	.015
	男性	3.71	1.02		
主な研究場所_研究室	女性	82.31%	.38	-2.93	.004
	男性	93.67%	.24		
主な研究場所_自宅	女性	12.31%	.33	-.09	<i>ns</i>
	男性	12.66%	.34		
主な研究場所_実験室	女性	30.77%	.46	-.95	<i>ns</i>
	男性	36.08%	.48		
論文数	女性	11.37	13.54	-7.38	.000
	男性	31.02	29.20		
業績合計（論文や著書等）	女性	12.09	15.72	-7.44	.000
	男性	34.21	33.34		
自尊心	女性	3.00	.85	-2.24	.026
	男性	3.22	.86		
神経質	女性	25.85	8.28	3.16	.002
	男性	22.85	7.91		
外向性	女性	22.57	7.74	-.24	<i>ns</i>
	男性	22.78	7.32		
ポジティブ感情	女性	3.13	.68	.46	<i>ns</i>
	男性	3.10	.66		
ネガティブ感情	女性	2.70	.71	1.40	<i>ns</i>
	男性	2.58	.73		
身体症状	女性	2.29	.82	4.13	.000
	男性	1.91	.73		
人生満足感	女性	4.61	1.33	-.04	<i>ns</i>
	男性	4.62	1.24		
関係性効能感	女性	4.16	1.29	-1.10	<i>ns</i>
	男性	4.32	1.24		
相互独立性	女性	4.54	1.17	1.33	<i>ns</i>
	男性	4.37	1.01		
業績への自尊心随伴	女性	4.05	1.34	-2.13	.034
	男性	4.37	1.21		
研究室の関係性	女性	4.37	1.18	-.26	<i>ns</i>
	男性	4.40	.99		

B 業績数とウェルビーイングについて

研究者の幸福観を構成する要素の1つであると考えられる業績数について、業績数とポジティブ感情、ネガティブ感情、身体症状、人生満足感、自尊心との相関を求めた。業績数としては、論文数、著書数などの回答を単純に合計したものを「業績合計」として計算した。表7に示した通り、業績の多さが自尊心を高めたり、ポジティブな感情を呼び起こす傾向にはないことが示唆された。特に女性では業績の多さが身体症状やネガティブ感情を高める負の効果を持つ傾向さえあった。業績数の少ない修士課程学生が回答者に多く含まれていた筆者らによる先行研究でも同様に業績とウェルビーイングが関連しないという結果が見られたことから、一般に研究者の幸福感を高めると考えられている業績は、ウェルビーイングに実際には貢献しない可能性がある。

表7 業績との相関係数

	ポジティブ感情	ネガティブ感情	身体症状	人生満足感	自尊心
女性	-0.14	0.16+	0.15+	-0.14	-0.01
男性	-0.05	-0.08	-0.06	0.08	0.08

+ $p < .10$

C ウェルビーイングとパーソナリティや心理尺度との関連について

ウェルビーイング関連指標と、パーソナリティや心理尺度との相関を男女別にみた結果は表8の通りである。

表8 ウェルビーイングとパーソナリティや心理尺度との男女別相関係数

	自尊心		ポジティブ感情		ネガティブ感情		身体症状		人生満足感	
女性										
神経質	-0.56	**	-0.28	**	0.60	**	0.60	**	-0.40	**
外向性	0.50	**	0.49	**	-0.23		-0.47	**	0.40	**
関係性効能感	0.47	**	0.35	**	-0.26	**	-0.36	**	0.42	**
相互独立性	-0.07		0.05		0.03		-0.03		-0.07	
業績への自尊心随伴	-0.06		-0.06		0.11		0.02		0.00	
男性										
神経質	-0.53	***	-0.46	***	0.60	***	0.66	***	-0.46	***
外向性	0.50	***	0.48	***	-0.30	***	-0.41	***	0.41	***
関係性効能感	0.44	***	0.35	***	-0.30	***	-0.38	***	0.39	***
相互独立性	0.23	**	0.28	***	-0.09		-0.16	*	0.29	***
業績への自尊心随伴	0.02		-0.00		0.18	*	0.14	+	-0.12	

+ $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

男女とも神経質さは自尊心、ポジティブ感情、人生満足感とは負の相関、ネガティブ感情と身体症状とは正の相関を持っており、外向性、関係性効能感はこれとは逆の効果を持っていた。

男性では相互独立性もウェルビーイングを全般的高める方向での相関を持っていたが、女性ではこの効果は見られなかった。また、男性では業績への自尊心の随伴は、ネガティブ感情や身体症状と正の相関を持っていたが、女性ではこの効果は見られなかった

D ウェルビーイングと家族や研究室との関係について

ウェルビーイング関連指標と、家族や研究室との関係を男女別にみた結果は表9の通りである。

表9 ウェルビーイングと家族や研究室との関係についての男女別相関係数

	自尊心	ポジティブ感情	ネガティブ感情	身体症状	人生満足感
女性					
年齢	0.08	0.00	0.04	-0.10	-0.04
既婚未婚(a)	0.05	0.04	-0.26 **	-0.16	0.14
子供の数	0.21 *	0.01	-0.05	-0.19 *	0.10
同居家族数	0.17 +	0.07	-0.14	-0.32 **	0.15 +
研究室・ゼミ・講座等滞在時間	0.09	0.05	0.03	-0.05	0.06
主な研究場所_研究室	0.06	-0.15	-0.01	0.06	-0.01
主な研究場所_自宅	0.00	0.04	-0.20 *	-0.11	0.03
主な研究場所_実験室	-0.03	-0.02	0.09	0.03	-0.02
修士課程院生数	-0.02	0.04	0.04	0.01	-0.02
博士課程院生数	-0.06	0.07	0.19 *	0.16 +	0.04
研究室の関係性	0.51 ***	0.51 ***	-0.27 **	-0.34 ***	0.55 ***
男性					
年齢	0.04	-0.05	0.02	-0.02	-0.04
既婚未婚(a)	0.15 +	0.05	-0.05	-0.11	0.11
子供の数	0.17 *	0.05	-0.13 +	-0.15 +	0.14 +
同居家族数	0.16 *	0.10	-0.18 *	-0.19 *	0.19 *
研究室・ゼミ・講座等滞在時間	-0.08	0.00	-0.17 *	-0.14 +	-0.01

	自尊心	ポジティブ感情	ネガティブ感情	身体症状	人生満足感
男性					
主な研究場所_研究室	-0.01	-0.07	0.05	-0.06	0.02
主な研究場所_自宅	-0.16 *	-0.02	0.10	0.05	-0.07
主な研究場所_実験室	0.04	0.05	-0.08	-0.10	-0.07
修士課程院生数	-0.07	-0.04	-0.11	-0.14 +	0.06
博士課程院生数	-0.10	-0.04	0.04	-0.01	-0.00
研究室の関係性	0.48 ***	0.40 ***	-0.40 ***	-0.38 ***	0.49 ***

+ $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

a: 未婚=0, 既婚 = 1

男女とも研究室の関係性は自尊心、ポジティブ感情、人生満足感とは正の相関、ネガティブ感情と身体症状とは負の相関を持っていた。年齢はいずれにも関係しなかった。

女性では既婚者の方がネガティブ感情が低く、子供の数や同居家族数が多いほど自尊心が高く、身体症状は少なかった。自宅での研究もネガティブ感情と負の相関を持っていた。また、博士課程院生数が多いほどネガティブ感情や身体症状は高かった。

男性では子供の数や同居家族数は自尊心、人生満足感と正の相関を持ち、ネガティブ感情や身体症状とは負の相関を持っていた。研究室滞在時間が長い方がネガティブ感情と身体症状が少なかった。自宅での研究は自尊心と負の相関を持っていた。

E ウェルビーイングを予測するものとは？ 重回帰分析による検討

上述の通り、ウェルビーイングには心理指標や研究室・家族構成との関連があることが示唆された。そこで、ウェルビーイング指標と何らかの関連があった項目を独立変数、ウェルビーイング指標のそれぞれを従属変数としたステップワイズ法による重回帰分析を男女別に行った。この分析には、年齢および文系/理系のカテゴリー変数と業績も投入、これらの効果がある場合には統制できるようにした。結果は表10に示すとおりである。

表10 ウェルビーイング指標それぞれを従属変数とした重回帰分析

	自尊心					
	女性 $R^2 = .55$			男性 $R^2 = .37$		
	β	t	p	β	t	p
研究室の関係性	0.40	4.47	***	0.21	2.39	*
神経質	-0.28	-3.00	**	-0.33	-3.70	***
外向性	0.21	2.28	*	0.22	2.68	**
同居家族数	0.17	2.21	*			

ポジティブ感情

	女性 $R^2 = .36$			男性 $R^2 = .29$		
	β	t	p	β	t	p
研究室の関係性	0.40	3.90	***	0.27	3.22	**
外向性	0.31	3.01	**	0.29	3.43	***
相互独立性				0.21	2.58	*

ネガティブ感情

	女性 $R^2 = .26$			男性 $R^2 = .31$		
	β	t	p	β	t	p
神経質	0.51	5.26	***	0.55	7.20	***

身体症状

	女性 $R^2 = .43$			男性 $R^2 = .50$		
	β	t	p	β	t	p
神経質	0.37	3.61	***	0.66	9.96	***
同居家族数	-0.29	-3.25	**	-0.14	-2.08	*
外向性	-0.27	-2.73	**			
博士課程院生数				-0.17	-2.57	*

人生満足感

	女性 $R^2 = .59$			男性 $R^2 = .31$		
	β	t	p	β	t	p
研究室の関係性	0.54	6.41	***	0.30	3.44	***
神経質	-0.28	-3.30	**	-0.34	-3.81	***
同居家族数	0.24	3.11	**			
博士課程院生数	0.20	2.58	**			
文系理系 ^a	0.20	2.58	*			
年齢	-0.16	-2.05	*			

+ $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

a : 理系= 1 文系 =2 でコード化

研究室の関係性は男女ともに自尊心、ポジティブ感情、人生満足感など、ポジティブなウェルビーイングを予測していた。いずれも β の値は女性の方が男性よりも高かった。同居家族数は男性では効果がなく、女性でのみ自尊心と人生満足感に有意な効果が見られた。博士課程院生数は男性の身体症状を減じ、女性の人生満足感を上げる効果があった。

パーソナリティ指標では、外向性が男女とも自尊心とポジティブ感情を予測し、女性でのみ身体症状を軽減させていた。神経質さは男女とも自尊心と人生満足感を低下させ、ネガティブ感情と身体症状を高める方向性を持っていた。

文系理系、年齢の効果は女性の人生満足感でのみ見られ、文系、年齢の若さが人生満足感を予測する方向であった。

研究室の関係性、同居家族数、博士課程院生数がウェルビーイングを予測する効果の性差を検討するため、Multiple Regression による分析を行った。まずウェルビーイングの指標を従属変数に、研究室の関係性、同居家族数、博士課程院生数を独立変数とした重回帰分析を男女別に行った。その後、それらの従属変数の予測力の性差を検討するため、性別と従属変数の交互作用を投入する分析を行い、性差を検討した。交互作用項が有意であれば、統計的に性差が認められたということになる。結果は表 1 1 の通りであった。

表 1 1 研究室の関係性、同居家族数、博士課程院生数の効果と性差の検証

	自尊心				ポジティブ感情				ネガティブ感情			
	β		性別との 交互作用		β		性別との 交互作用		β		性別との 交互作用	
	女性	男性	t	p	女性	男性	t	p	女性	男性	t	p
研究室	0.53	0.48	0.32	ns	0.52	0.40	-0.60	ns	-0.28	-0.39	-1.62	ns
関係性	***	***			***	***			***	***		
同居	0.17	0.10	-0.97	ns	0.08	0.03	-0.57	ns	-0.12	-0.13	0.10	ns.
家族数	*									+		
博士課 程院生 数	-0.03	-0.03	-0.00	ns	0.08	0.03	-0.52	ns	0.17*	-0.02	-1.70	<.10

結果、研究室の関係性は男女差なく、いずれの指標にも効果を持っていた。また、同居家族数が身体症状を減じる効果は男女ともにみられたが、その効果は女性の方が強かった。同居家族数が自尊心や人生満足感を高める効果に男女差は見られなかった。博士課程院生数の効果は女性ではネガティブ感情や身体症状を高め、男性ではそれらを減じる方向であったが、いずれも効果は小さく、男女差は有意ではなかった。

F 研究スタイルと幸福観

次に、研究スタイルと自尊心、ポジティブ感情、ネガティブ感情の関係について検討した。研究スタイルとして「ほとんど共同研究」または「ほとんど個人研究」という回答を

「大きな研究スタイルの偏り」とし、「共同研究が多い」「個人研究が多い」を「中程度の研究スタイルの偏り」、「共同研究と個人研究が半々」という回答を「小さな研究スタイルの偏り」として、研究スタイルの偏りによるウェルビーイングへの影響を、性別の影響と併せて分散分析した（図2参照）。ポジティブ感情ではスタイルの偏りと性別の交互作用が有意な傾向があり（ $F(2, 285)=2.60, p<.08$ ）、女性では偏りがある方がポジティブ感情が高くなるが、男性ではそのようなパターンは見られなかった。ネガティブ感情ではスタイルの偏りの主効果（ $F(2, 285)=3.77, p<.03$ ）、性別との交互作用（ $F(2, 285)=4.52, p<.02$ ）ともに有意で、スタイルの偏りが大きい方が中程度の場合に比べてネガティブ感情が強かったが、その効果は男性で大きかった。身体症状でも性別との交互作用が見られ（ $F(2, 285)=7.43, p<.001$ ）、女性ではスタイルの偏りが大きいほど身体症状が軽減されるのに対して、男性では逆にスタイルの偏りが大きいほど身体症状が強くなっていた。人生満足感についても性別との交互作用があり（ $F(2, 285)=4.20, p<.02$ ）、女性ではスタイルの偏りが中・大の方が人生満足感が高いのに対して、男性では偏りが大きいほど人生満足感が下がっていた。自尊心では研究スタイルの影響は見られなかった。総じて、女性研究者ではスタイルに偏りがあり一貫性がある方がウェルビーイングに良い影響があり、男性ではスタイルに偏りが無くバリエーションがある方がウェルビーイングに良い影響があるといえよう。

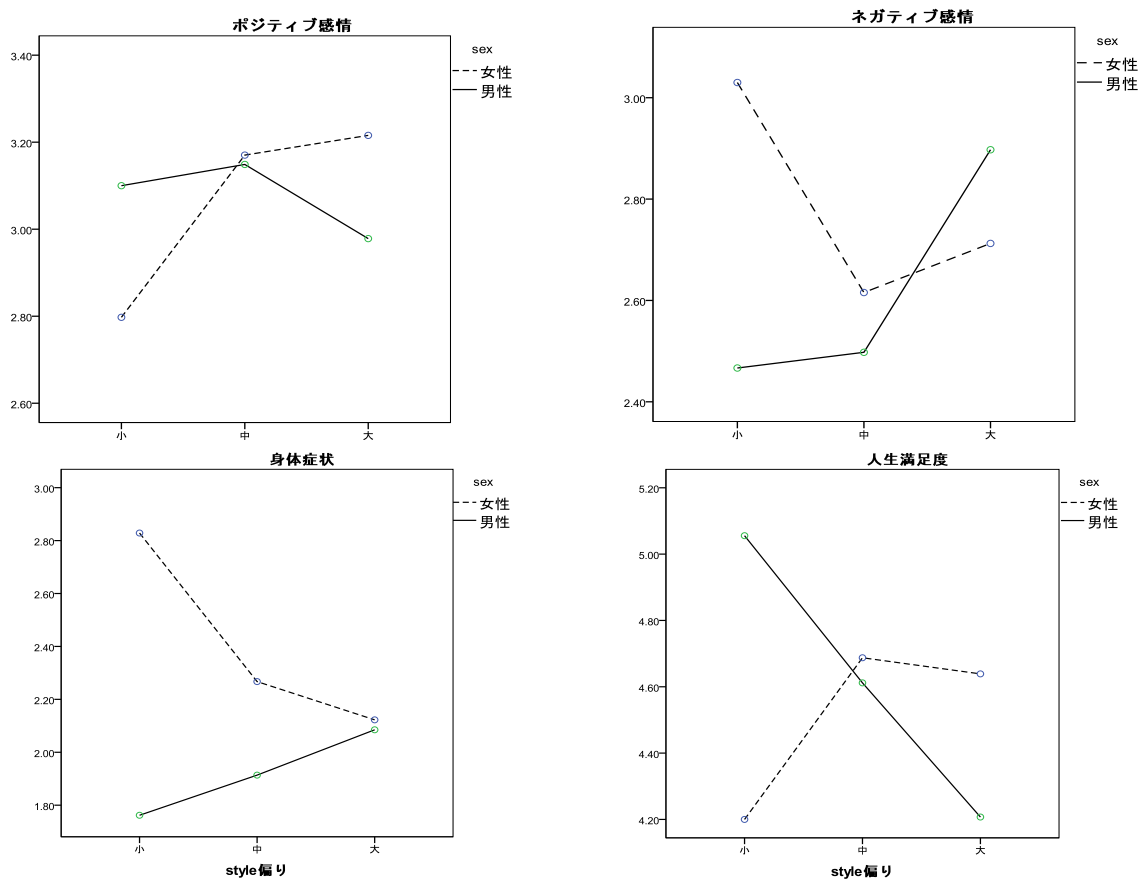


図2：研究スタイルと well-being（性別ごと）

図2に研究スタイルがウェルビーイングに与える影響を性別ごとに示した。個人研究のみ、共同研究のみといった研究スタイルに偏りのある若手研究者では、ウェルビーイングが低くなる影響が見られた。

G パートナーの有無と幸福観

パートナー（結婚相手もしくは交際相手）の有無がウェルビーイングに与える影響を検討するため、パートナーの有無と性別を独立変数、ウェルビーイングのそれぞれの指標を従属変数とした分散分析を行った。パートナーがいる方が自尊心と人生満足感が高く（ $F_s > 4.46, ps < .04$ ）、ネガティブ感情や身体症状も低かった（ $F_s > 10.92, ps < .001$ ）。性別との交互作用は見られなかった。

3. インタビュー調査（質的調査）

（1）目的

研究者にとって、研究生活と私生活を明確に分けることは難しく、また、人間関係においても研究と私生活が複雑に絡みあっている。質問紙調査や2008年～2009年に行った予備的調査（近藤ら、2010）から、指導教官との関係が研究室における人間関係に影響を与えていること、研究職につく上での業績の位置づけのあいまいさなどが明らかになった。研究上や研究室内の人間関係といった点については、協力者のプライベートに深くかかわる範囲であることから、なかなか質問紙では探ることが難しい。そこで本調査では、インタビュー調査を用いて、親密性と研究状態についての調査を行い、量的調査と合わせて考察することを目的とする。具体的には、予備的調査を踏まえ協力者の現状をより引き出すために、1.属性（現在までの学歴、研究歴、婚姻・子供の有無）、2.ライフスタイル（社会との接触度—研究室以外の人間関係、生活リズム）、3.キャリア決定要因（研究者という職業を選んだ時期、進路決定に影響を与えたこと、人など）、4. PD問題（学生指導）、5. 今後の研究生活についてという大まかな設問をたて、自由に語ってもらう半構造化面接を行った。

（2）方法・分析

A 対象 京都大学と雇用関係にある者（准教授～研究員）

協力者は調査紙を配布する際にインタビュー協力のチラシを同封し、質問内容などを説明した上で協力を得られた人。協力者が持つ背景の違いなどを考慮し、個別インタビューを行った。協力者は女性6名、男性7名で内訳は表12から表16に示した通りである。

表 1 2 : 調査協力者専門領域分布

専門領域	総合・新領域	人文社会系	理工生物系	医学臨床系
男性人数	0	2	4	1
女性人数	0	0	2	4
合計	0	2	7	4

表 1 3 : 調査協力者身分分布

身分	PD/RPD	研究員	助教	講師	准教授
男性人数	0	2	1	0	4
女性人数	1	2	1	0	2
合計	1	4	2	0	6

表 1 4 : 婚姻状況

	未婚	既婚
男性人数	4	3
女性人数	3	3
合計	7	6

表 1 5 : 調査協力者年齢分布

身分	20代	30代	40代
男性人数	1	2	4
女性人数	0	4	2
合計	1	6	6

表 1 6 : 子供有無

	有	無
男性人数	3	4
女性人数	2	4
合計	5	8

B 方法及び倫理的配慮

インタビューは京都大学こころの未来研究センターの研究室および協力者指定の場所で、約1時間半の個別インタビューを行った。インタビューに際しては、インタビューの内容

は個人が特定されないよう加工された上で、論文や発表に使用すること、インタビュー内容を録音することへの許可を得て、録音し、終了後、テープ起こしを行った。以下、インタビュー時の発話は、個人が特定されないよう加工した上で掲載する。研究者の生活は研究分野により大きな違いがみられるが、個人を特定されないように、それぞれの分野を大きく1. 医学臨床系、2. 文系、3. 生物理工系とした。

(3) 結果

A 属性について

現職につくまでの経緯は様々であるが、以下にみるように医学臨床系とその他の分野で違いがみられた。

<現在までの学歴・研究歴>

- ・他大学を卒業して、臨床に出てから大学院から京都大学、現職に。大学にきてから、臨床にいる時よりも規則正しく生活できるようになった（医学臨床系、男性）。
- ・学部から京都大学でそのまま大学院に進学し、他校、他研究施設を経て現職に。研究施設や研究資金が充実している京都大学に戻ってきたかった（生物理工系男性①、男性②）。
- ・他大学を卒業し、他大学大学院を経て現職に。京都大学は目先の利益よりも研究の面白さを評価してもらえる大学だと思う（生物理工系、男性④）。
- ・学部から京都大学、大学院をへて現職（文系男性①、生物理工系男性③、女性①、②、医学臨床系女性②）。
- ・学部から京都大学にいるが、大学院進学にあたり女性であることを理由に進学に難色を示されたり、昇進を妨害された（医学臨床系女性②）。
- ・他大学大学院を卒業し、現職に（文系、男性②）。
- ・他大学を卒業し、臨床で助産師をやって、留学し他大学大学院を卒業し、現職。臨床の最前線からは離れてしまったが、時間の余裕はできた（医学臨床系、女性①）。
- ・京都大学で学部終了後、臨床に出て、大学院に戻ってきた（医学臨床系、女性③）。
- ・京都大学で学部、修士を卒業後、一般企業に就職後、博士課程進学、家族の留学を経て、現職に（医学臨床系、女性④）。

今回の協力者に関して、特に男性に関しては京都大学以外の大学を卒業した者と京都大学出身者の割合が半々であり、また、一度は京都大学以外の職場を経験している者が大半であった。また、医学臨床系の者（特に医師免許、看護師、助産師免許保有者）は、学部卒業後、臨床経験を積んだ後に、大学院に進学することが通例であるため、他分野とは研究歴が異なったり、研究職を選ぶことによりライフスタイルが大きく変わることも語りからみられた（詳細については、婚姻、子どもの有無のところを参照）。男性協力者の多くが

出身大学に関わらず研究施設としての京都大学を評価し職場として能動的に選択していた。また、女性協力者の場合、女性研究者ならではの生きにくさや家族の都合によって、研究が中断された語りがみられる。

B ライフスタイル

<婚姻・子どもの有無、ライフスタイル>

- ・臨床にいたら子どもを2人とか難しい。大学院に戻って子どもを産むっていう人けっこう多いんですけど、私もそうです（医学臨床女性）。
- ・子どもが2人いるんですけど、第一線でというのは無理かなって。時間も限られるし、教育も研究もというのは私には難しい。だから、有期雇用でも研究ができるポジションありがたい（医学臨床系女性）。
- ・今、他分野の研究者とつきあっていて、将来のことも考えるんですけど、お互いの研究のことを考えると一緒に住める時がくるのかなって。その辺り、難しいなとか考えます（生物理工系女性）。
- ・結婚してから、夜、夕食は家で食べるようになりましたね。研究にはあまり影響はないです。妻は仕事をしていないので、家事は全部任せています（生物理工系男性）
- ・子どもをお風呂に入れるとか、それぐらいですけど、家族との時間をとるようにしています。独身の時よりも生活リズムは良くなっているかもしれません。（生物理工系男性、医学臨床系男性）
- ・まだ生活が不安定ということもあるし（有期雇用）、結婚は考えてないわけではないけれど、ちょっと先になりますかね（文系男性）。
- ・独身の時は夜遅くまでとか、週末も研究室にいたけれど、結婚してからはパートナーから何か言われるわけではないけれど、やっぱり早く帰ったり、研究室にいる時間は減りましたね。（医学臨床系女性）。
- ・結婚とか子どもを持つとかあんまり考えてないです（生物理工系女性）。
- ・年齢的にも子どもを産むのがもう難しいということもあって、子どもを持ちたかったという気持ちはありますね（医学臨床系女性）。
- ・とくに二人目が産まれてからはまとまった時間をとるのが難しいこともあって、業績っていわれると厳しいものがありますよね（医学臨床系女性）。
- ・今の研究室にきたはじめの頃ですが、子どものためにはやく帰らないといけないとか、その辺りのことを周りの人に理解してもらうことが大変でした。今はそんなことはないですけど。計画をしても、子どもの熱がでたから実験を他の人に頼まなくてはいけなかったり。今はもう周りも理解してくれてますけど（医学臨床系女性）。

女性協力者からの語りからは、婚姻による研究継続の難しさや子どもを持つことによ

ってのライフスタイルの変容が語られ、婚姻や子どもによって研究スタイルや職業の選択を求められたことがうかがえる。一方、男性協力者に関しても、子どもを持つことによって、研究スタイルを変更したりと、私生活における充実を図っている様子が伺えるが、婚姻や子どもを持つことによる職業選択や業績の減少などの悩みは聞かれなかった。また、未婚者にとっては生活の安定や研究継続といった問題があげられた。

C キャリア決定要因

研究者を職業として選んだ理由に関しては、年少期から目指した者もいれば臨床を経て、選択した者もあり、体系立てることは難しい。ここでは、職業として研究職を選択するにあたって、実際に直接的・間接的に影響を与えうる指導教官との関係に着目する。

<大学院生時代の指導教官との関係について>

- ・教授が研究室にいる時には、やっぱり帰れないというのはありましたね。(生物理工系男性)
- ・院生というか助教時代は、教授が院生や学部生を指導するという事はないので、それが仕事というか、学生の代わりに論文を書くのは当たり前でした。(生物理工系男性)
- ・わりとリーダーシップをとる先生というか、研究室は教授中心に昼食は研究室みんなでとるとか、論文の執筆順は教授が決めるとか。そういったところでは、論文を書く際の役割と結果の割が合わないところとかありますよ。(生物理工系男性)
- ・自分がいる時に学生が帰っていると、ちょっと 面白くないというところもあって、教授が帰らないと院生も帰れないというような、そういう暗黙のものがありました。うちの教室は先生がいる時間は院生もいて当たり前。毎日仕事のように、月曜日から金曜日まで。アルバイトなんかできないという感じ。(医学臨床系女性)
- ・基本的には先生のやっているテーマの一部を研究する。先生の講義の資料をつくったりとか。でも博士課程の後半になれば、論文に名前を載せてくれたり、研究者として扱ってくれたので。(医学臨床系女性)
- ・基本的にテーマ選択とかも自由にやらせてもらってましたし、論文についてもフェアに扱ってもらえましたね。ただ、院生同士年齢と学年が逆になってたりした時に、ちょっと難しいところもありました。(生物工学系男性)
- ・研究について、それなりに面白い結果がでたら面白いinchやうっていうような感じなので、野放しになっている、放し飼いにされている感じ。(生物工学系女性)
- ・結果がでないと、君もう臨床にかえりなさいとか言われる人もいて、研究を続けるかどうかの選択肢は院生にはないかもしれない。(医学臨床系女性)
- ・もう興味に沿うことやったらみたいなの、わりとそこらへんはおおらかというか、結果ができればオーライみたいなのところがある先生なのでただ、よく呼びつけられた。だから先生がいると計画通り研究が進まないみたいなのところはあった。(医学臨床系女性)

研究業績や研究について指導教官の与える影響は大きく、院生時代は生活リズムも指導教官によってつくられていくような側面がみられた。指導教官によっては、時間的拘束や教授の補助的な役割を担わされるようなこともあった。しかしながら、分野によって院生時代のこのような状態は当たり前のこととして捉えられている。これは、共同研究が多い分野では研究の都合上、多くの時間を指導教官や他院生と過ごすことがあるが、研究とは関係のないところでも束縛されるような、ある種の親密性が築かれていた。

D 今後の研究生生活と学生指導について

今回の対象は有職者であることから、今後の研究生生活や学生指導について質問した。

<今後の研究生生活・学生指導について>

- ・京都大学はやっぱりおもしろい研究ができるところ、自分の研究をこれからも進めていきたい。(生物理工系男性)
- ・まだ期限付きの身分なので、研究施設が充実している京都大学に残れたらいいと思っています。期限付きだと綱渡りですよ、資金獲得とかポストとか(生物理工系男性)
- ・資金獲得とか、学生指導とかで研究生生活って聞かれるとどうかな？って。しっかりできているとはいえません。(医学臨床系女性)
- ・教育にも興味があって、やっていきたいと思っています(生物理工系男性)。
- ・学生指導は難しいと思いますね。どう指導したらいいのか、問題を抱えている学生もいて、自分の感覚(いいと思っている方法)でやったら、学生にそれがあっていないというか・・・(生物理工系男性)。
- ・学生といつでもフリーにディスカッションできるようにできたらと思っています。ある先生のところは廊下に、イスとテーブルがあって、気軽にオープンにいつでも話ができる、そういった議論から新しいことが生まれる(研究、アイデア)と思うんです(医学臨床系男性)。
- ・PD 問題、確かに私たちが院生だった頃とは状況が少しずつ変わってきていると思いますから、その辺りは注意していかないといけないと思います。まだ、就職先をえらばなければなんとかなってますけど(生物理工系男性)。
- ・博士課程に進学する学生が少なくなっていますから、博士課程を修了して職(研究職)が見つからないっていうことはまだ今のところないですけど、学生を集めなくてはいけないと思います。修士課程までは多いんですけど(生物理工系男性)。
- ・教育も研究もっていう第一線はもう無理だと思うんです。私の場合子育てっていうのもありますが、その間の業績っていうのが増えていかないから、これからそういう職に応募するとかいうのはないと思います(医学臨床系女性)。
- ・今後の計画にも結婚とか子どもを持つとか入っていないので、研究中心の生活になると思います(生物理工系女性)。

すでに指摘されているように、研究者としての就職が難しくなっている現状についての語りも見られたが、就職状況によっては分野によって差があり、労働条件や環境を選ばなければ研究者としての第一歩を歩める分野とより厳しい分野があり、指導者となった自分が学生だった頃から比べても厳しい状況であるという認識が示された。

今後の研究生活については、男性研究者と女性研究者の間に発言の内容の違いがみられた。男性研究者の場合は自身の研究と教育のバランスを中心に語られるのに対して、女性研究者は、私生活とのバランスに言及するものが多かった。また、期限付きポストについている者にとっては安定した職につくことは依然として課題として残っており、研究の充実が難しい状況にあることが示唆された。

4. 総合考察

質問紙調査においては、若手研究者のウェルビーイングにかかわると予測される要因を探索的に調査した。具体的には、公私における対人関係や研究業績、そしてパーソナリティが、研究者のウェルビーイングにどのように影響するか検討した。結果は多岐にわたるが、概ね、以下のようにまとめることができるだろう。インタビュー調査の結果とまとめて考察する。

1) パーソナリティとウェルビーイングの関係

パーソナリティの二次元、すなわち外向性と神経質さは、研究者のウェルビーイングと密接な関係にあることが示された。このこと自体は、研究者に限らない一般サンプルを対象とした先行研究 (DeNeve & Cooper, 1998; Hayes & Joseph, 2003)、そして筆者らによる大学院生を主たる対象とした予備的調査 (近藤ら, 2010) を追認するものであった。研究者のウェルビーイングにもまた、パーソナリティという、個々人の中で比較的安定している性質が強いかかわることが示されたと言えよう。これは重要な知見ではあるが、「研究者のウェルビーイング」という個別の問題ではなく、ウェルビーイングそのものにかかわる問題であり、本論文でこの問題を特に取り上げて論じることには限界がある。本研究のパースペクティブにおいてより重要な問題は、こうした本人のパーソナリティを調整した上で残る、研究者のウェルビーイングにかかわる要因を探ることにある。

2) 研究業績とウェルビーイングの関係

著書数、論文数などによって評価された業績と、研究者のウェルビーイングとは強い相関関係は見られなかった。こうした業績は、研究者にとっての仕事上の成功を、少なくとも一面において反映するものである。仕事上の成功がウェルビーイングと関係していないという結果は、いささか直感に反するものと言えよう。

もっとも研究業績数は、専門とする分野によってその多少が変化することが予想できる。また一般的に言って、研究歴が長いほど研究業績は多くなるはずである。実際、本調査の

データからも、理系研究者の方が、そして年齢が高いほど研究業績が多くなることが示された。加えて、平均値で見ると、男性研究者の方が研究業績が多いことも示されている。そこで、これらの要因を調整した上で、研究業績とウェルビーイングの関係を検討したが、統計的に有意な関係性は見いだすことができなかった。以上から、本調査においては、研究業績と研究者のウェルビーイングに有意な関係を見いだすことはできなかったと結論づけることができるだろう。

インタビュー調査では、医学臨床系、生物理工系しか協力者が得られなかったという点はあるが、共同研究の場合、論文のアイデア、データ収集、分析、執筆という作業エフォートと執筆順などが一致しない点、また、ライフワークとしての論文と仕事としての論文の違いなどが語られ、簡単に業績と自尊心を結びつけることはできない。また、女性研究者の場合、結婚、出産によって研究に割ける時間が減り、私生活の状況によっては研究歴と業績が比例しないこともある。

しかし、以上の結果をもって、研究業績と研究者のウェルビーイングに全く関係がないと結論づけるのは尚早である。第一に、本研究で対象となっているのは京都大学に勤務する研究者であり、対象者のサンプリングにおいて偏りがあったことは否めない。対象者をより広く集めた場合には、何らかの関係が見いだされる可能性はある。第二に、本研究で測定したウェルビーイングは、普段の生活において感じる幸福感であった。しかし研究の成功から得られる幸福感は、論文や著書の公刊達成時や、新たな知見の発見時などに得られるものであり、特定の時間と状況において強く感じられるものかもしれない。そのため、業績の多い研究者は、本調査の質問紙では測定できていない幸福感を感じている可能性は残る。もっとも、この推測を逆に言えば、研究業績の多寡は、研究者の日々のウェルビーイングとは直接に関係していない可能性を示唆するとも言うことができる。

3) 対人関係とウェルビーイングの関係

他者との関係性がウェルビーイングと関係するという、本研究の作業仮説を支持する結果が得られた。プライベートにおける対人関係とウェルビーイングの関係については、同居家族数、配偶者などのパートナーの存在、子供の存在が、それぞれ正の関係を持つことが示された。また職場における対人関係とウェルビーイングの関係についても、研究室の関係性が、ウェルビーイングと正の関係を持つことが示された。質問紙調査のこのような結果は、インタビュー研究で語られる私生活による研究スタイルの制限とは食い違う。インタビュー研究においては、特に女性研究者の場合、出産や子育てによって研究時間が削られること、また、研究業績が上がらないことなど、私生活と研究生活の両立に対する葛藤が語られていた。しかしながら、また、女性協力者の語りみられるように、パートナーを持つことや子どもを持つことへの希望も語られており、研究の充実だけではなく、一人間としての生活の充実を研究者が願っていることが質問紙調査の結果となったと考えられる。ただし、男性でのみ相互独立性がウェルビーイングを高める方向であるというように、

どのような対人関係の結び方がウェルビーイングを予測するのかについては、男女で異なる可能性ことが示唆された。男性研究者では相互独立的な志向を持って他者と接することが、研究室の運営や学科・講座内での他者との関係性の構築の上でも、一つのモデルとして機能しているが、女性研究者では必ずしもそうではないのかもしれない。この点については今後より詳細な検討が必要であろう。

研究室内の人間関係について、予備調査研究（近藤ら, 2010）では、博士課程4年以上の学生数が、大学院生らを中心とした対象者の自尊心と負の相関を示していた。大学院生らのウェルビーイングを考える上で示唆的な結果であったが、有職者を対象とした本調査では追認する結果は得られなかった。いくつかの分析において博士課程大学院生数とウェルビーイングの指標に有意な関係が見られたが、その方向性は一貫しておらず、また効果としても小さいものであった。

予備調査研究（近藤ら, 2010）における、また一つの重要な知見は、研究スタイルが偏らず、個人研究と共同研究のどちらをも経験していることが、ウェルビーイングに正の効果を持っているというものであった。これに対して本調査の結果は、研究スタイルの偏りがウェルビーイングと関係することを示す一方、その方向性については性差が見られることを示した。すなわち、男性研究者においては予備調査研究と一致し、研究スタイルが偏らないことが、ウェルビーイングに正の効果を持っていた。対して女性研究者においては、研究スタイルがほぼ個人研究、またはほぼ共同研究に固定されている方が、むしろウェルビーイングに正の効果を持っていた。予備調査研究ではこうした性別との交互作用は観察されておらず、また予備調査研究の対象者の性別が男性に偏っているということも無かった。なぜ有職女性研究者においてのみ、研究スタイルが偏っている（固定されている）ことが正の効果を持つのか、そもそもこの傾向が頑健なものであるか、さらに検討が必要である。

一つの可能性としては、有職女性研究者では、研究時間の制限が大きいと、さまざまなスタイルによる研究を並行的に行うことの負担が大きい可能性がある。実際、本調査のデータからも、女性研究者では研究室等での滞在時間がより短く、また研究室以外の場所を主たる研究場所としている割合も高かった。また女性研究者においてのみ、同居家族数が研究業績に負の効果を及ぼしていた。ワークライフ・バランスを考えたときに、理由の如何を問わず、結果的により多くを“ライフ”に振り分けている女性研究者においては、一つの研究スタイルに統一した方が、効率的な研究の実施が可能となり、日々のウェルビーイングにつながっているのかも知れない。ただし日々のウェルビーイングと研究業績に有意な相関が見られないことは上述の通りであり、この推測を裏付けるだけの十分なデータは、本調査からは得られていない。いずれにせよ、研究スタイルという、研究室の人間関係を基礎づけるシステム的な部分が、研究者のウェルビーイングと関係することが、予備調査を含めた二回の調査から繰り返し示されたことの意義は大きいと言える。

4) 研究者にとっての幸福を研究することの意義

本調査の結果は、研究者の業績が、少なくとも研究者の日々日常のウェルビーイングとは、あまり大きな関係を持っていないことを示すものであった。このことを、どのように評価すべきだろうか。少なくとも二つの方向からの解釈が可能だろう。一つは、業績が幸福にはつながらないという見方であり、すなわち業績を原因、幸福を結果とする見方である。この見方は、研究者にたいしてある種のシニシズムを導くものと言えるだろう。また一方で、研究者が幸福感を感じているからといって、研究業績が増加するわけではない、という逆の因果の方向から、この結果を眺めることもまた可能である。この見方は、たとえば研究行政を司る立場の人々に対して、個々の研究者のウェルビーイングに配慮することには、あまり意味がないという議論を導くかもしれない。

しかし、ウェルビーイングという問題を考えるにあたっては、こうした功利的な視点は、必ずしも適切でないのかもしれない。たとえば本調査で扱った業績と幸福感の関係では、ひとくちに業績といっても、作業エフォートと評価の不一致や興味関心のない分野での業績を求められるなど、ライフワークとしての業績と仕事としての業績があり、単純に結び付けることができないことがわかった。達成感や満足感を考える上では、業績の数だけではなく、質の側面を考慮しなければならないだろう。また、日々の生活において幸福感を感じることは、それ自体が価値を認められてしかるべき問題であり、仕事上の達成（業績）とは、完全に切り離すことは無理なまでも、ある程度は分けて考えられるべき問題なのかもしれない。

筆者らがさらに重要と考えるのは、本研究から示された、人間関係、特にプライベートな側面での人間関係と、研究者のウェルビーイングの関係である。本研究から、研究者という、ある意味特殊ともいえる職業においてもなお、仕事を離れたところでの人間関係の構築が、日々の幸福感につながっていることが示唆された。このことは、これから研究の道を志す学生たちが、彼ら彼女らのライフプランを構築する際に重要な示唆を与えるのではないかと考える。同様に、指導者の立場にある者が、指導下にある若手研究者の研究指導に留まらず、研究を離れた場における生活の重要性にも注意を払うきっかけとなることを期待する。

今回は、京都大学と雇用関係にある者についての調査であった点、また、調査サンプルが限られていることから、この結果を一般化することはできない。今後は、他大学でも調査を行い調査対象者数を増やすとともに、直接観察や個別事例の社会学的分析など多角的な研究手法を取り入れて研究者の幸福感の実態について明らかにし、より一般的な見解を提示したい。

引用文献

- Cacioppo, J. T., Hawkley, L. C., & Bernston, G. G. (2003). The anatomy of loneliness. *Current Directions in Psychological Science*, 12, 71-74.
- Costa, P.T., & McCrae, R.R. (1992). Revised NEO personality inventory and NEO five-factor inventory: *Professional manual*. FL: Psychological Assessment .
- Diener, E., & Suh, E. M. (Eds.) (2000). *Cultural and subjective well-being*. Cambridge, MA: The MIT Press.
- Resources.DeNeve, K. M., & Cooper, H. (1998). The happy personality: a meta-analysis of 137 personality traits and subjective well-being. *Psychological Bulletin*, 124(2), 197-229.
- 遠藤由美・柴内康文・内田由紀子 (2008). 人間関係はいかに well-being と関連するか 関西大学経済・政治研究所 調査と資料, 105, 1-28.
- Havighurst, R.J.(1953). Human development and education, New York:Longmans, Green.(ハヴィガースト,R.J. 荘司雅子・他 (共訳) (1958) .人間の発達課題と教育—幼年期から老年期まで 牧書房).
- Hitokoto, H., & Uchida, Y. (2010). *Interdependent happiness: Self and well-being in cultural contexts*. Unpublished manuscript, Kwansai Gakuin University.
- 今田絵里香 (2008) . 「京都大学の女性ポストドクター」 京都大学女性研究者支援センター (編) 京都大学男女共同参画への挑戦 明石書店 pp.75-103
- 岩崎久美子 (2009) .「ポストドクター問題の背景」 国立教育政策研究所日本物理学会キャリア支援センター (編) ポストドクター問題—科学技術人材キャリア形成と展望 世界思想社 pp.3-31
- 近藤恵、大石高典、内田由紀子、平石界 (2010). 若手研究者のウェルビーイング—対人関係がパフォーマンスと精神健康に与える影響について 京都大学グローバルCOEプログラム 親密圏と公共圏の再編成を目指すアジア拠点ワーキングペーパー 京都大学における男女共同参画に資する調査研究 1
- Markus, H., & Kitayama, S. (1991). Culture and the self: Implications for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review*, 98, 224-253.
- Rosenberg, M. (1965). *Society and the adolescent self-image*. Princeton: Princeton University Press.
- Ryff, C.D., & Keyes, C. L. M. (1995). The structure of psychological well-being revisited. *Journal of Personality and Social Psychology*, 69, 719-727.
- Singelis, T. M. (1994). The measurement of independent and interdependent self-construals. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 20, 580-591.
- 内田由紀子 (2008) . 日本文化における自己価値の随伴性—日本版自己価値の随伴性尺度を

用いた検証— 心理学研究, 79, 3, 250-256.

Uchida, Y., Kitayama, S., Mesquita, B., Reyes, J. A. S., Morling, B. (2008). Is perceived emotional support beneficial? Well-being and health in independent and interdependent cultures. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 34, 741-754.

Yoshimura, K., Nakamura, K., Ono, Y., Sakurai, A., Saito, N., Mitani, M., Yamauchi, K., Onoda, N. & Asai, M. (1998). Reliability and validity of the Japanese version of the NEO five-factor inventory (NEO-FFI): A population-based survey in Aomori prefecture. *The Japanese Journal of Stress Sciences*, 13, 45-53.

付記

本研究は京都大学文学部 GCOE「親密圏と公共圏の再編成をめざすアジア拠点」及び京都大学女性研究者支援センターの支援を受け実施されたものである。支援をいただいた京都大学文学部 GCOE「親密圏と公共圏の再編成をめざすアジア拠点」及び京都大学女性研究者支援センターの皆様、そして、調査紙及びインタビューにご協力いただいた皆様に心より感謝申し上げます。

Appendix. 業績を予測するもの

本研究のデータからは、ウェルビーイングと業績のあいだに直接の関係は観察されなかった。しかし一方で、業績の多寡は、研究者という職業を生きる者にとって重要な関心事であることは論を待たないであろう。本研究の主要テーマからは外れるものの、京都大学に所属する研究者への大規模調査という機会から得られたデータを最大限に生かすという視点から、以下では業績とどのような指標が関連性を持っていたか報告する。

具体的には、本研究の質問紙に含まれていた各指標と、業績との相関係数を男女別に検討した。男女のいずれかで有意な相関があったものは表 A-1 の通りであった。

表 A-1 業績との相関係数

	年齢	理系か 文系か(a)	共同研究 かどうか(b)	D2 の 数	博士課 程院生 数	子供の 数	同居家 族数
女性	0.38**	-0.18	0.20*	0.28**	0.15+	0.11	-0.09
男性	0.43**	-0.17+	0.07	0.00	-0.01	0.26***	0.20*

*** p < .001, ** p < .01, * p < .05, + p < .10

a 文系=2, 理系 = 1 のカテゴリ変数

b 数値が高いほど共同研究の割合が高い

年齢の効果は男女ともに見られた。女性では共同研究であるほど業績数が伸び、また、D2 の院生の数が本人の業績に貢献している可能性があった。これに対して男性は子供の数や同居家族数が本人の業績と正の相関を持ち、院生の数や共同研究の影響はなかった。また、理系の方がやや業績が多い傾向があるようだった。

年齢以外の指標が業績に与える影響は、実際には年齢によって媒介されている可能性がある（年齢が高い男性の方が子供の数が多く、そのため業績が多い、等）。そこで、年齢以外のそれぞれの指標が業績に与える影響について、それぞれ年齢の効果を経済的に統制して重回帰分析を行って検討した。結果は表 A-2 の通り、男性の子供の数や同居家族数の効果は消失し、理系であることのみが業績数を予測していた。女性では年齢の効果を経済的に統制しても、博士課程院生数、特にD2 の数の効果や、共同研究の効果は消えなかった。また、女性では年齢を経済的に統制すると、理系の方が業績が多く、さらに同居家族数が負の効果を与える影響も見られた。

表 A-2 業績を従属変数としたβ（年齢の効果統制後）

	理系か 文系か(a)	共同研究 かどうか(b)	D2 の 数	博士課 程院生 数	子供の 数	同居家 族数
女性	-0.19*	0.17*	0.31***	0.18*	-0.03	-0.17*
男性	-0.24**	0.09	0.07	0.04	0.09	0.05

*** p < .001, ** p < .01, * p < .05, + p < .10

2009年度京都大学における男女共同参画に資する調査研究「若手研究者のウェルビーイングと対人関係」(研究代表：近藤(有田) 恵)による成果である。

【メンバー】()内は2009年度プロジェクト時点

近藤(有田) 恵 (京都大学こころの未来研究センター 特定研究員)

平 石 界 (京都大学こころの未来研究センター 助教)

内田由紀子 (京都大学こころの未来研究センター 助教)

大石 高典 (京都大学こころの未来研究センター 特定研究員)